別紙１

法人名　特定非営利活動法人のらんど

事　業　計　画　書

事業名	さまざまな主体が関わる見沼の田畑の管理を地域の人に知ってもらう事業
枠の種類	ネーミング事業（(株)富士薬品ドラッグセイムス　環境保全支援事業）
1. 事業の目的	見沼田んぼに増える遊休農地のうち、昨年度の耕作実績より畑地を４倍の広さに広げ、より様々な分野のＮＰＯ法人等と協働し、農地として活用、保全する。農作業には貧困支援だけでなく障害福祉活動を行う他団体の利用者にも活躍してもらう。 新型コロナウィルス感染症の影響で地産地消の重要性が再認識される今、多くの人を集めるイベントの開催が難しいからこそ、地域の住民に見沼田んぼの存在や管理の必要性、そこで行われている様々な違いを持つ人による保全管理の活動について知ってもらう。
2. 事業で取り組みたい地域や社会の課題	・管理する農家やNPOの高齢化により増加する見沼田んぼの遊休農地。昨年よりも広い面積を農地として活用することで、見沼田んぼの環境を保全。 ・継続的に営農することで、地域の障害福祉や貧困支援などの利用者の仕事の選択肢となる。 ・新型コロナウィルス感染症の拡大により、地産地消の重要性が再認識される中、見沼田んぼの存在や意義を地域住民に知ってもらう。 ・若者の関わりが少なくなっている見沼。ＳＮＳネイティブ世代である大学生を中心とした若者に、見沼の魅力を発信してもらう。
3. 具体的な事業内容	見沼田んぼ内の遊休農地を活用して、以下の事業を展開。長年見沼田んぼで田んぼ保全の事業を行ってきたＮＰＯ法人見沼保全じゃぶじゃぶラボと連携し、技術や地域連携に関する協力をしてもらう。。 【昨年度との違い】 ・管理面積の増加。畑半反から２反へ。地元の協力が得られるようになってきたことによる。 ・ＮＰＯ法人見沼保全じゃぶじゃぶラボ（不耕起米栽培による見沼保全）だけでなく、ＮＰＯ法人ほっとプラス（貧困支援）、ＮＰＯ法人ビーポップ（障害福祉）、浦和北ロータリークラブといった、より多くの団体と協働する。 ・コロナウィルスの影響で、広く人を集めるイベントの開催ができないからこそ、地域の人に知ってもらう工夫が必要。 ・たくさんの人を集めるのが難しいからこそ、大学生を中心とした若者の得意なＳＮＳで、若い層からの発信に力を入れる。

（１） 農地を活用した農作物の生産管理

① 場所：さいたま市緑区南部領辻　畑２反（昨年より 1.5 反増）、田んぼ半反

② 時期：7 月から 2 月。（7 月から 11 月：米づくりと野菜づくりのための毎月 1~2 回の土曜日の定例作業日と、平日の管理作業、見回り。12 月から 2 月：土づくりを主とした平日の管理作業、見回り）

③ 内容（収穫量は天候等の影響により増減します）

・畑：里芋（150kg）、八ツ頭（150kg）、カボチャ（300 個）、唐辛子（5kg）、サツマイモ（50kg）の生産

・田んぼ：米（70kg）の生産

・作業者：のらんどスタッフ、この事業に通年で参加者、障害福祉施設利用者（地域活動支援センター農（あぐり）、地域活動支援センター夢燈館）、貧困支援利用者（ＮＰＯ法人ほっとプラス）。

（２） 見沼田んぼの野菜を活用した加工品の開発

見沼の野菜をより多くの人に知ってもらえるよう、生の野菜だけでなく、日持ちがし、手軽に手に取ってもらえるような加工品を開発。ピクルスを想定。

① 場所： のらんど事務所

② 時期・内容：7 月から 2 月（7 月考案、野菜の収穫、試作品製作、賞味期限試験、完成）

（３） 見沼田んぼの存在意義、活用の重要性を地域住民に知ってもらうための広報

① ＷＥＢ上での広報

・法人ホームページ

・さいたま市市民活動サポートセンターサイト「さポット」への活動紹介

・埼玉県 NPO 情報ステーション NPO コバトンびんでの活動紹介

② ＳＮＳを活用した広報

ＳＮＳネイティブ世代である大学生の協力（明治学院大学、東京農業大学）を得て、ＳＮＳでの発信方法を見直し、学生たちにもＳＮＳの発信に関わってもらうことで、10 代から 20 代にも響く発信をめざす。また、拡散力のある世代から多世代への波及を狙う。管理の様子を動画配信も行う。

・Facebook

・Instagram

・Twitter、

③ 野菜・加工品の販売活動を通した広報

・のらんど事務所前

・地域の小売店、生協など

<table>
<tr><td></td><td>④ チラシ
7月から11月まで毎月と、2月に発行。
・さいたま市市民活動サポートセンター50部
・児童館　30部×3か所、・公民館　30部×5か所
・保育園　120部×1か所、・学童　100部×1か所
・市内障害福祉施設等　100部
⑤ 団体広報誌・メールマガジン
団体会員、広報紙・メルマガ会員、団体サービス利用者 200 人/月</td></tr>
<tr><td>4. 具体的な事業の実施計画</td><td>○事業のスケジュール
<table>
<tr><td>時期</td><td></td></tr>
<tr><td>7月</td><td>田畑管理、一部野菜収穫開始、加工品考案・試作、広報物作成・ＳＮＳ発信準備・発信開始、野菜販売場所交渉、(6月に、田植え・野菜植え付け済み)</td></tr>
<tr><td>8月</td><td>田畑管理、加工品試作</td></tr>
<tr><td>9月</td><td>田畑管理、加工品試作・試験（賞味期限）</td></tr>
<tr><td>10月</td><td>田畑管理、米収穫・脱穀、加工品試作・試験</td></tr>
<tr><td>11月</td><td>田畑管理、野菜収穫、収穫祭、野菜販売、加工品試験</td></tr>
<tr><td>12月</td><td>田畑管理、野菜販売、加工品試験</td></tr>
<tr><td>1月</td><td>田畑管理、加工品試験</td></tr>
<tr><td>2月</td><td>田畑管理、加工品販売試験</td></tr>
</table>
○広報計画について
（3）参照。</td></tr>
<tr><td>5. 個々の事業の実施により達成したい成果の具体的な内容</td><td>（1） 農地を活用した農作物の生産管理
① 管理面積
見沼田んぼ内　畑２反　田んぼ半反
② 収穫量
・畑：里芋（150kg)、八ツ頭（150kg)、カボチャ（500個)、唐辛子（5kg)、サツマイモ（50kg)
・田んぼ：米（70kg)
③ 作業参加者
のらんどスタッフ、通年参加者のほか、障害福祉や貧困支援の利用者に仕事として作業してもらい、さまざまな人の活躍をめざす。
毎月第一土曜日の定例作業日のほか、平日の管理作業を行う。
・障害福祉施設利用者２団体(地域活動支援センター農(あぐり)、地域活動支援センター夢燈館)
・貧困支援利用者１団体（ＮＰＯ法人ほっとプラス）
・その他１団体</td></tr>
</table>

	（２） 見沼田んぼの野菜を活用した加工品の開発 賞味期限検査も含め１月までに１製品完成。 （３） 見沼田んぼの存在意義、活用の重要性を地域住民に知ってもらうための広報 ① ＷＥＢ上での広報 ＷＥＢ情報を見てアクション（メールなどにより問合せした人）20 組（団体、企業も含む） ② ＳＮＳを活用した広報 Facebook、Instagram、Twitter のいずれかで 700 いいね ③ 野菜・加工品の販売活動を通した広報 ・売り上げ目標 10 万円 ・地域小売店、生協など１店舗での販売許可を得る。 ④ チラシ チラシを見ての参加　100 人
6. 事業の実施体制	事業実施責任者：１名　サカール祥子、農地管理作業責任者：１名　サカール祥子、農地管理作業員：１名　二瓶伸雄、広報：１名　高橋葵、農地管理作業アドバイザー：１名　人見太郎、経理：１名　高橋葵
7. 来年度以降どのように事業を継続し発展させていくか	① 今年度の農地は維持管理、周辺の遊休農地の管理もしていく。 見沼田んぼ内の地域とのつながりを強化する。農業技術を向上と人材の確保に努める。 ② 見沼田んぼ周辺地域との連携 障害福祉や貧困支援等の団体との連携強化。また農家とも連携し、今後の人材を単一の団体や農家等事業所で確保するのではなく、地域で確保するという仕組みを作っていく。 ③ 広報 今年度の反省を踏まえてより多くの地域の人に情報を届けられるように。 ④ 資金集め 通年会員・単回参加者の募集、農体験イベントの開催によって、実際に見沼田んぼの農地保全に関わってくれる人を増やすとともに、活動資金を集める。野菜や加工品の生産販売の継続。
8. 今回の事業が他の団体、行政等が実施する同種の事業と比べて優れていること	・見沼保全、障害福祉、貧困支援等、他団体との連携を行い、さまざまな人の活躍が見込めること。 ・昨年度と比較して農地を増やしていること。 ・今後自力で継続していくための事業内容であること。